

## 2. お天気キャスターの裏話

(財)日本気象協会北海道支社 気象情報部 小 島 修

### 1. はじめに

天気予報をいつもご利用いただきありがとうございます。

天気の解説担当になって早くも20年が過ぎ、1978年（昭和53年）からはNHKのテレビに出演をさせていただいております。最初は解説ではなく、ただ、口を開いているだけで、最初の放送が終わると、汗・汗・汗の連日でした。最近はようやく天気解説の面白さが少しあってきましたが、これからもラジオ・テレビなどで天気解説の仕事をさせていただきますので、宜しくお願ひします。

さて、今回の内容がお天気キャスターの裏の話となりますと、気象とはほとんど関係が無いような気がしました。今回はテレビの中で話をした、気象の一口メモの話題を文章にさせてもらいます。

### 2. 春

春の語源、「張る」、「晴れる」などいろいろ言われています。意味は、生き物たちが活動を始め、植物などの芽がふくらむ。あるいは、冬の間雪雲に覆われ太陽の恵みの少ない、日本海側の地方では日照時間が多くなってくるなど。一般的には、木の芽がふくらんでくる「張る」がピッタリのようですが、気象的には「晴れる」でしょうか？

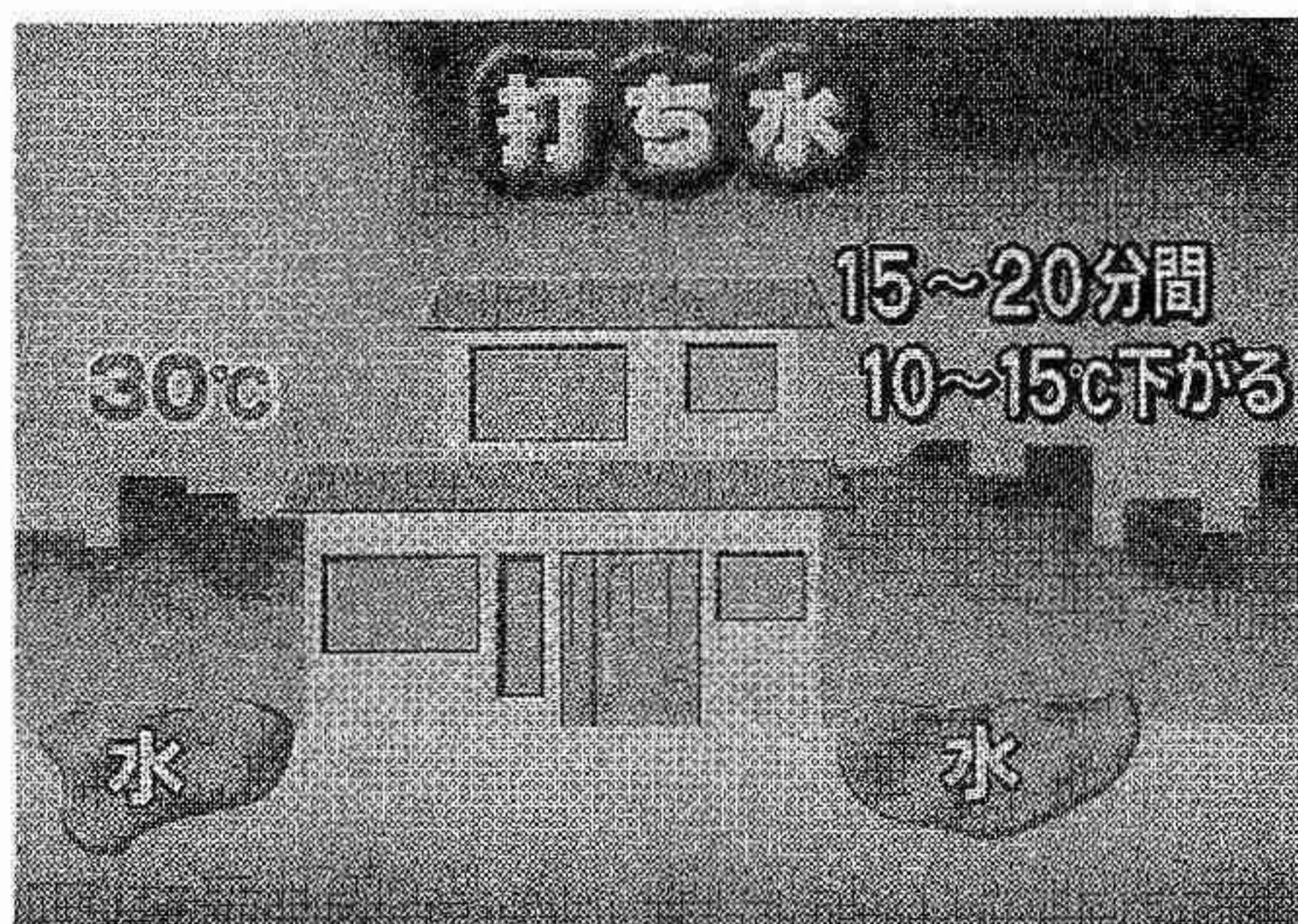
春は、風の強い季節でもあり、春先の強風は、空気の乾燥とも重なって、大火につながる心配も言われます。北海道でもある地域にのみ吹く、独特の強風に昔から呼び名がついています。雄武周辺の「日向風」ひかたかぜ、日に向かって吹く風、南西の風。寿都の「だし風」、長万部方面から吹き込み、日本海に吹き出す南よりの風。羅臼の「羅臼風」、知床半島をウトロ方面から羅臼方面に吹き降りる風。日高の「日高しも風」、十勝地方から日高山脈を吹き降りる風。札幌の「手稻おろし」、中山峠方向から札幌市内に吹き降りる南西の風などがあります。世界でもいろいろな呼び名があります。

ゴビ砂漠周辺の北東風「カラブラン」春から夏に吹き、砂嵐とともに暑い風で、カラは黒、ブランは雪あらしの意味。地中海北岸の暖かい南風「シロッコ」サハラ砂漠の乾燥した風が海を渡ると高温多湿に変化し、霧や雨を伴う。エジプトで春に吹く南風「ハムシン」大量の砂ほこりを運び、見通しが悪くなり、非常に乾燥し暑くて不快感を呼ぶ。アフリカ西部の冬季に吹く北東風「ハルマッタン」風塵とともに多い。しかし、雨期の蒸し暑さとは違い、涼しく健康によいと考えられ、別の呼び名を「ドクター」とも呼ばれているそうです。



### 3. 夏

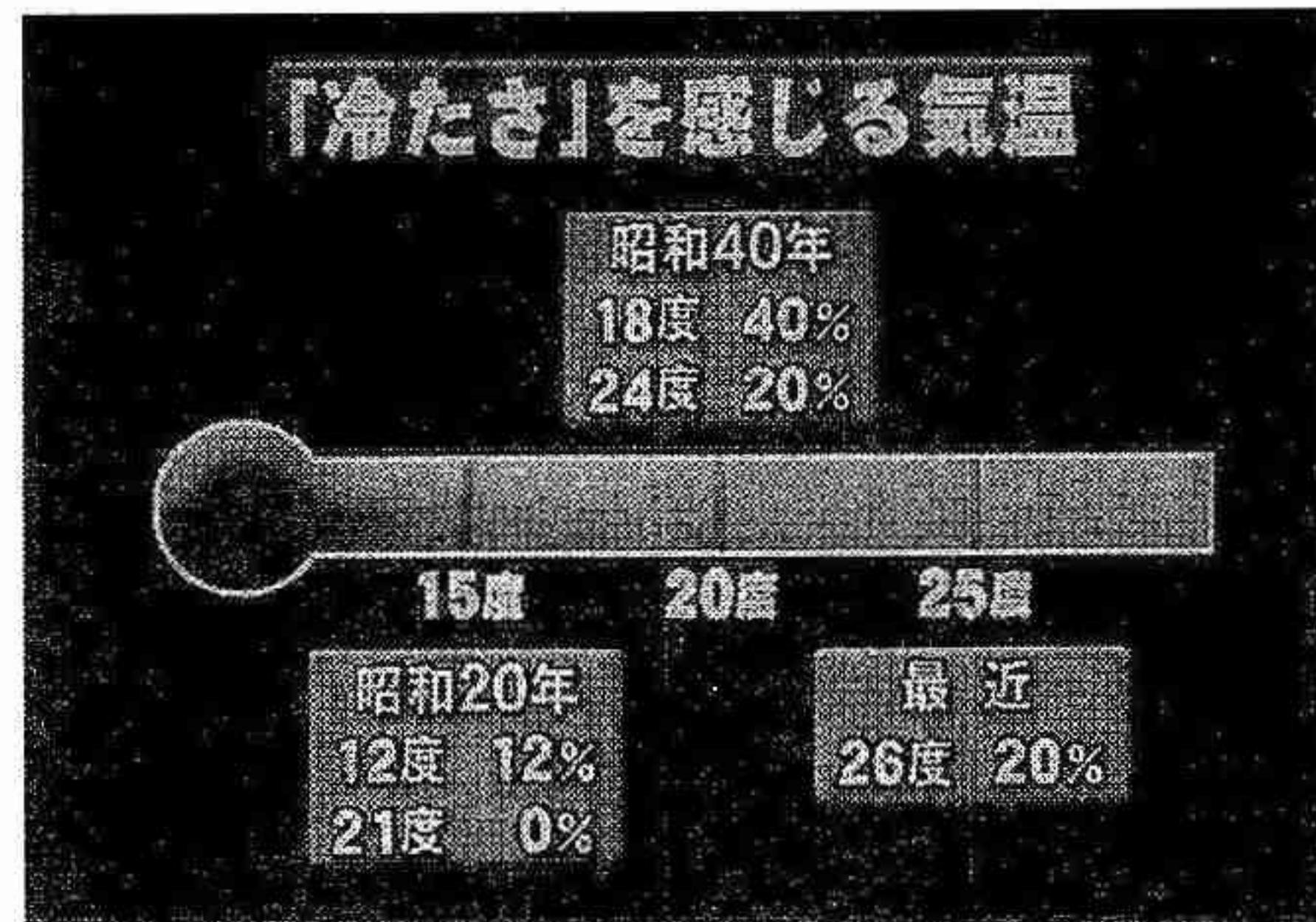
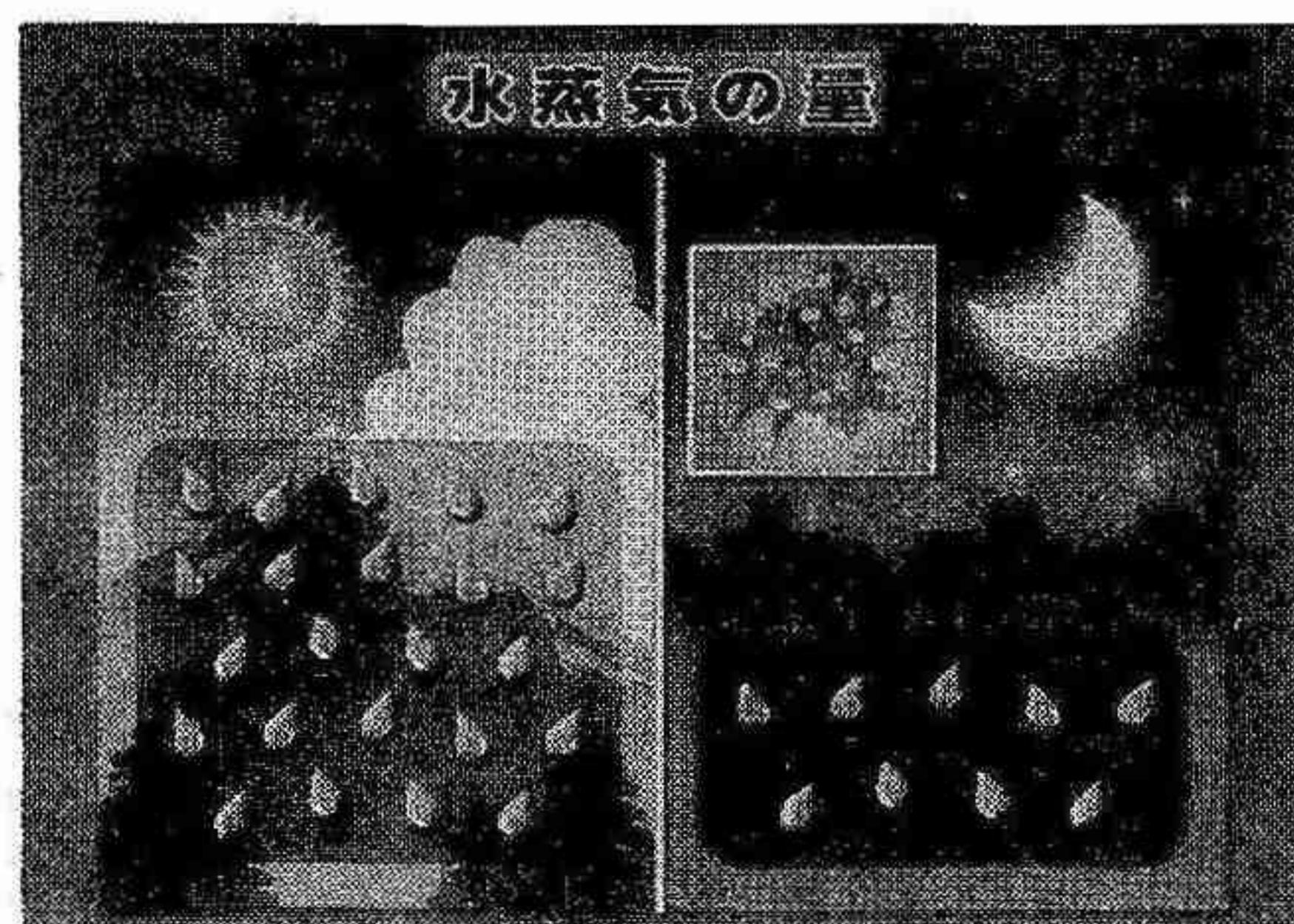
夏は漢字の話題です。「夏」という漢字は、頭に飾りをつけて舞う人を描いた文字です。夏と言えば暑さ。漢字の「暑」は、上の日は「太陽」、下の日はコンロで、間に挟まれた部分は「木が燃える様子」を表しています。じりじりとした暑さが伝わる解釈でしょうか。暑さも最高潮になってきますと、涼を求めるために色々な方法があります。最近は室内冷房が一番ですが、昔からの夏の風物、打ち水やうちわが恋しくなります（今年の流行は扇子だそうです）。夏の太陽が照って、地面の温度は30度以上と高くなります。そこに家のまわりに水をまきますと、水の蒸発によって、地面の温度も下がります。この時間はわずか15分から20分程度でそれ以上時間が経ちますと、再び上昇してきます。うちわは、涼を求める道具としては昔から利用



されています。うちわを扇ぐ速さで風の強さも違いますが、一分間に90回くらいだと、約1.4メートル。この風を扇風機の風で比較してみると、約2.5メートルから3メートル離れた所で、正面から当たっている強さと同じです。一方、夏の暑さで、気温と商品の売れ方に大きな変化があり、一般的に19度で半袖のシャツ、22度でビール。水着は24度、アイスクリームは25度、スイカは27度だそうです。「冷夏」か「暑夏」は商品の売り上げ、経済にも大きな影響があります。暑さの話題をクールダウンして、北海道に冷たい空気をもたらすオホーツク海高気圧の存在も忘れてはいけません。農作物に影響がでることもあり「夏の東風は凶作」の言い伝えもあります。

### 4. 秋

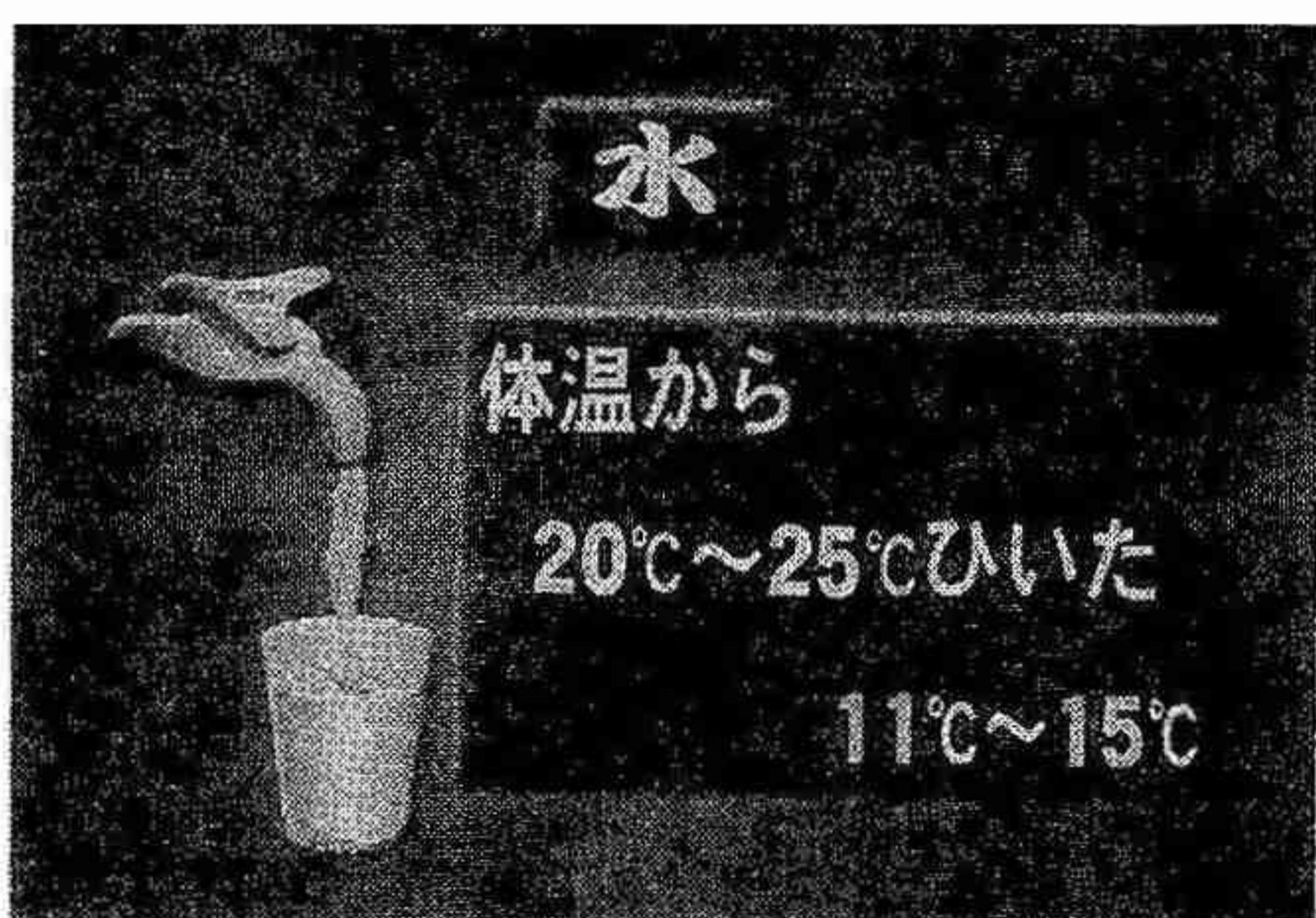
秋の語源は、秋がしづんで「無・なき」、草木が赤らむ「緋・あけ」、一般的には空が清く明らかな意味の「あきらか」の説が有力と言われています。紅葉前線の南下とともに、秋は収穫の秋でもあり、食欲の秋に



つながります。日中は気温が高く、水蒸気も空気中に姿を隠していますが、気温の下がりと同時に姿をあらわし、草木などに水玉として私たちにも目で確認ができます。これを「露」で、さらに気温が下がると「霜」になります。露は透けて見えると言う意味もあり、露見・暴露など言葉もあります。さて、寒さの感じ方も、昔と今ではずいぶん変化しています。冷たいと感じる方が、昭和20年ころでは12度で12%、21度では誰も冷たいと言わなかった。最近では26度でも20%の方が冷たいと答えたそうです。昔から見ると我慢がたりない、いや生活環境が大きく変化してきた結果でしょうか？

## 5. 冬

冬の漢字は、食物をぶら下げてためておく様子を描いた、象形文字だそうです。冬は物を貯めておく、氷の季節。「寒」は要塞で敵を防ぐように、氷の冷たさを防ぐ様子を現した文字と言われています。初冬の穏やかな暖かい日を「小春日和」といいますが、ドイツでは「老婦人の夏」、老年期に近づいた女性が一瞬見せる美しさ。ロシアでは「女の夏」、寒さに備えて織物をする女たちが、額に汗する季節。アメリカでは「インディアン・サマー」、先住民が思いがけず現れた暖かい日に、冬支度をするために平原に姿を現すなどの意味がありました。このインディアン・サマーには別な意味もあり、19世紀に腹黒い船主が、多額の保険をかけて、嵐に船をだして故意に沈没させて、保険金をせしめる事故があった。その後、船員をまもる法律ができた。船腹に積荷の喫水線をしめし、船の安全な運航につとめたそうです。「I・S・」のマークはインディアン・サマーを意味しています。冬は寒さの強まりと同時に酒を飲む機会が多くなります。飲み水のおいしい温度は、体温から20～25度を引いた、11度～15度と言われています。ビールの飲みごろは、夏は6度から8度。冬は10度



から12度。日本酒は利き酒の時の温度は、室温20度、湿度60%に保ち、10度から15度に冷やした酒でテストするそうです。普通の燗は50度。熱燗は55度以上。ひと肌は45度以下が目安だそうです。気持ちよく飲む酒は、温度には関係なく美味しい、「心が温まる」。